

小児科だより vol.60

～ 単純性股関節炎 ～

2021.9.1 発行

こんにちは。まだ残暑は厳しいですが、ようやく朝晩は、一息つけるようになってきました。

現在、小児科外来では、毎年春や秋に流行する、パラインフルエンザウイルス感染症などのお子さんを見かけるようになってきました。発熱や咳などの症状が強くなることもあります。多くは自然軽快する風邪の一種です。皆様がいま、特に注意して行っている感染症対策に加えて、症状のある時は、早めによりしっかりと療養することで対応しましょう。

さて、今月の小児科だよりは、『単純性股関節炎』についてです。小児において、急激に股関節痛、跛行（片足を引きずるようにして歩く）をきたす代表的な疾患のひとつです。

好発年齢は2～10歳で、ピークは5歳であり、男の子に多いとされています。ウイルス感染、外傷、アレルギーなどの関与が提唱されていますが、明らかな原因は特定されていません。安静にして様子を見ることで、自然に軽快し、後遺障害も残さないため、ほかの疾患（化膿性股関節炎やペルテス病など、鑑別については後述します。）でないことを確認することが重要です。

発熱を伴う場合は、化膿性股関節炎との鑑別が重要になります。化膿性股関節炎は、早期の外科的処置を要することもあり、初期症状が似ているため注意が必要です。また、ペルテス病は経過の長い疾患ですが、初発症状は跛行が最も多いことが知られており、これらの疾患でないことを確認するために、血液検査、関節超音波検査、レントゲン検査およびMRI検査などを適宜行います。

通常は、数日から2週間程度の安静で自然に軽快しますが、症状が強く安静で改善しない場合は、安静保持を目的に入院することもあります。スポーツなどへの復帰は、痛み、可動域制限などを考慮して判断する必要があるため、整形外科医の診察が必要になります。また、軽快した後、時に再発して繰り返すことも知られており、診断困難例においては、長期にわたる経時的な経過観察と検査が必要になることもあります。

いずれにしても、気になる症状がある場合は、早めに整形外科または小児科にご相談ください。

